
ショートショート集

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショート集

【Nコード】

N4629D

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

ショートショート集です。四話から増えません。ショートショートを、思いつきません。申し訳ありません。(2009年3月)

夢見がちな頭

夢見がちな頭

精神病院の真っ黒い壁のシミが悪魔の姿に変わり言った。

「お前の望みを三つだけかなえてやろう」

「三つだと!!」

俺はヒステリックに叫んだ。

「一つでいい!! この夢見がちな頭をなんとかしてくれ!!」

幸福のボート

幸福のボート

海はどこまでも凪いでいた。

男は一人小さなボートで漂流していた。

彼はどこまでも運に見放された男。

人生が船路なら、男の船は不幸のボート。

生い立ちから幼少期少年期思春期青年期、そして成人した後も、
良い事なんて一つもなかった。

不幸な記憶ばかり。

すべてをリセットして外国でやり直そうと船に乗ったら沈没した。

もう、いい。

すべてをあきらめている。

だけど悔しくてたまらないのだ。

死ぬ前に一言くらい言わせてくれ、というものだ。

彼は立ち上がり天に向かうと罵倒した。

「やいこらてめえ、神様つて野郎、いるんなら聞きやがれ。どんな人生でも一つ位良いことがあるもんだろうが。てめえ、俺のこと忘れてやがったろう。何が全知全能だつ。聞いてあきらめられ。いいか。俺はこのまま死ぬんだ。てめえの片手落ちだ。ざまあみやがれ」
言うだけ言ったらすすきりした。後はもう死ぬのを待つばかりだ。

しかし何週間経つても、死は、その影すら訪れず、3年と3カ月後、男は通りかかった船に救助された。

字数あわせでせうroppyakujijounantenga
gasugitekakeneleze.sanngyoudes
umusyouseitugamotemojikanaiika.
sanngyoudesumohanamuzukasigaya
onngyoukuraiinarannantokanarisou
uda.mijikakeretabamijikaihodoyoi
tohamomowanaiगतyoumijikannowok
aitemita.

そしてすべてがとまった

そしてすべてがとまった

私は世にいうマッドサイエンティスト。私財をなげうち寝食を忘れ昼夜兼行不眠不休で研究したかいあって、つひに『時を止める装置』を完成した。

時を止めることは理論上ではさほど難しいことではない。時が止まるくらいまで重力をかけてやればいいのだ。が、この方法では人間が押しつぶされてしまう。とてもではない。さればどうすればいいのか。それが第二案である。

宇宙の膨張を止めてやればいいのだ。宇宙はビッグバン以来ずっと膨張を続けている。現在もそれは止まっていない。つまりその膨張とともに時が在る。ゆえに膨張を止めてやれば時も止まるのである。

はたして宇宙の膨張を止めるなど荒唐無稽できつこないと諸君は思われるかもしれない。が、私は私財をなげうち寝食を忘れ昼夜兼行不眠不休で研究したかいあって、つひにそれを完成したのだ。

それでも諸君は思われるかもしれない。時を止めたらこの私の『時』まで止まってしまうのではないかと。

心配ご無用である。全宇宙の時間が止まっても、リモコンのスイッチを押した人間にだけは時間の経過が起こりうるように装置は作られている。

さて。

今、私は装置のリモコンを持ち、屋敷の近くの喫茶店に来たところである。

記念すべき装置の試運転をこの喫茶店で行うのだ。

というのも。

このウェイトレスがはなはだ鼻持ちならないのである。

私を不審者を見るような目で見る。

確かに私は身なりにはかまわない性質である。だが、私は断じて浮浪者ではない。

人をして浮浪者あつかいするこのウェイトレスをまずは血祭りにあげてやるのである。時を止めてカウンターの上に担ぎ上げ、ドジョウすくいの格好でもさせてやれば、多少は反省するのではないか。

現に今も、私がいつもの席に座っているというのに水も持つてこず、人を上から下まで怪訝な目をしてねめまわしている。

こういうやつなのだ。だがそれも今日までだ。思い知るがいい。

スイッチオン。ボタンを押そうとした瞬間、誰かがものすごい勢いで入り口のドアを開き何かを大声で叫んだがかまわずボタンを押した。

装置は正確に作動した。目に見える範囲の店内の人間がすべて止まっている。あのウェイトレスも歩く途中で止まっている。壁の時計を見た。止まっている。4時5分。

パーフェクトだ。

私はスイッチを押す瞬間飛び込んで来た客を見ようと首をひねった。とたん。

ものすごい衝撃を体に受けまるでどこから落ちる感覚とともに

椅子にしりもちをついた。

そこは今いた喫茶店。なにもかも普通通り。みんな動いている。例のウェイトレスが不審な顔つきでお冷を持ってきた。なにがなんだかさっぱりわからぬ。

時計を見れば3時50分。なんと時間を逆戻りしているではないか。

私はふらふらと席を立ち、何も注文せずに店を出た。

いったいなにがどうなったのか？ 歩きながら私は考えた。装置は完璧だった。そこに問題はない。ではいったいなぜ私は15分前の過去に来てしまったのか？ 考えた末一つの仮説を立てた。

時間には異分子をはじき出す性質があるのではないか。

つまりスイッチを入れたあの時、ただ一人だけ動くことのできた私は異分子であり、その世界からはじき出されたのだ。そうして15分前の世界にやってきた。

そこまで考えて私は猛烈にダッシュした。喫茶店に戻るのだ。今、4時4分。4時5分に装置を作動させた私がここにいるということ。は、装置を解除する人間が存在せず、あの4時5分の時点で全宇宙がストップしてしまう。ウェイトレスが不審な顔をしたのはいつの間にか私が店内にいて、何も注文せずに出たかと思うと、すぐに戻ってきたからだ。

私はものすごい勢いで喫茶店の扉を開いた。叫んだが言葉になっていなかった。スイッチを押す私の後姿が見えた。

そしてすべてがとまった。

Copy

学校帰りの電車の中、僕はガールフレンドのユカと、きのう一緒に観た映画の話で盛り上がっていた。

それは今年最大の話題作でタイトルは『マトリックス』。人類が機械の電池と化し、現実だと思っていた世界が実はマトリックスと呼ばれる仮想空間だったという内容。

「ありえるよねえ」僕は笑いながら彼女に言った。

「この現実が全部夢だったらどうする？」

ユカは意味ありげな笑みを浮かべ僕の袖をつかみ、
「これも夢？」と聞いた。

僕はちよつとドキツとしてぎこちなく彼女の手を取った。

手をつないでいると彼女のぬくもりが伝わってくる。

「夢なわけないよねえ」と笑い飛ばした。

僕たちは明日バイクで出かけることを約束してわかれた。

「10時には迎えにいくから」別れ際僕は言った。

明日は祝日で学校は休みだ。

僕は早々に支度を済ませ、それからどこへ行くかガイドマップをながめながら、いつの間にかうとうととしてしまった。

「……………」
「……………」
「意識レベル上昇……………」
「……投与」
「……駄目です。効きません」
「意識レベル上昇してます……………」
「覚醒します」
「わかった。諸君。ここはわたしに任せて退席してくれたまえ」
はつきりと聞こえた男の声に僕は目を覚ました。

手術台の上に僕は寝ていた。

横にマスクをつけ白衣を着た医者がいた。

僕はわけがわからなかった。

「ようこそ。『現実』へ」医者が言った。まるで映画の中の台詞のよう。

「臓器移植の最大の問題はいつの時代も適合と拒絶反応だった」
何の話かわからず僕は混乱した。

「この問題はクローン技術の進歩で解決した」
僕は麻酔の効いたはつきりしない頭で必死で話を理解しようと努めた。何の話かわからない。

「現在では人は生まれると同時にクローン保険に加入する。保険に加入すれば自分のクローンを作ってもらえる。クローンは培養液の中で成長する。夢を見ながら……………」

「理解できるかね？ A - 30458892号君。要するに保険加

入者が事故や病気で臓器が必要な時、クローンから移植するのだ。そしてクローンの見る夢は保険加入者の現実の生活にリンクしている。脳移植を希望する遺族にも対応できるようにね。たとえば脳死状態でもクローンの脳を移植することにより今まで通り生活できる……。まあ、君の場合は簡単な足の切断手術だ」

僕は理解できなかった。僕にクローンがいるのか……。違う、逆だ。僕がクローンなんだ。

「そろそろ麻酔が効いてきたようだ。では、夢の世界へと戻るがい。……。なぜ君にこんな話をしたのかって？ 一度してみたかったのだよ。毎日何体もの移植手術をしているうちにね。現実を教えてやりたくなったのだ」と、医者は低く笑った。

その不気味な笑い声の中、僕の意識は、再び深い泥沼の中へと沈んでいった。

目を覚ますと明るく清潔な病室の中だった。

ベッドに僕は寝ていて、そばに目を泣きはらしたユカと母がいた。その後ろに父もいた。

いったい、何がどうなっているのか……。起き上がろうとしたが体が動かない。必死で考える僕に母が説明してくれた。

バイクでユカを迎えに行く途中、事故を起こし左足を失ったのだ、と。

そう言われてみれば、バイクで車にぶつかった記憶があるような気がする……。

左足を失ったのはショックだったが、誰もが命が助かってよかったと言った。

意識が戻ってよかったと泣いているユカに僕は言った。

「とても変な夢を見たんだ……」

だけど、その夢をうまく説明することはできなかった。僕は話すのをやめた。

誰が信じてくれる？　僕自身信じられない。夢としか思えない。

あれから十年近く経った今も、僕は誰にも夢の話をしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4629d/>

ショートショート集

2010年10月28日14時03分発行